

5月5日 復活節第6主日

使 15:1-2,22-29 黙 21:10～23 ヨハ 14:23～29

1. 使

wv.28-29 「聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。……」

これは、現代人には一見まるでぴんと来ないように聞こえる古めかしい思考なのでしょうか。しかし、聖書に親しんでいる人の場合には、直ちに次のような重要な言葉が思い起こされるはずで、「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(エフェ 1:7) 「(キリストは)御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」(ヘブ 9:12) 私のインターネットサイトで、小論集の中の「聖書入門」に、“人間のもっともらしい解説によってではなくて、聖書は聖書によって解釈することが大切です”と書いておきましたが、これが基本なのです。“教会、すなわち秘義としてすでに現存するキリストの国……の起源と発展は、十字架につけられたイエスの開かれた脇腹から流れ出た血と水によって現わされ……”とも教えられています(教会憲章 3)。

旧約聖書では、「血はその中の命によって贖いをするのである」(レビ 17:11)から、血を食べることも絞め殺した動物の肉を食べることもしてはならないと、教えられて来ました。現代においては食肉はすでに加工されて消費者に届くので、このような聖書の言葉はもはや文字通りには実感出来ませんが、「神のものは神に返しなさい」(マコ 12:17)という意味で考えれば、献金や奉仕への真剣さが問われているのが分かります。

2. ヨハ

wv.23-24 「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。……わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。」

聖書を断片的にしか読まない人は、“言葉”や“御言葉”とは、イエスが教えた数々の教訓や戒めのことだと早合点し勝ちです。ところが新約聖書を通読すると、御言葉とは出来事(使 10:36-37)、十字架の言葉(Ⅰコリ 1:18)、すなわち神がキリストによって世を御自分と和解させてくださった福音(Ⅱコリ 5:19)を指す宣教用語であることが分かります(ロマ 10:17)。神はこの終わりの時代に、“肉となって私たちの間に宿り”(1:14)、その死と復活によって永遠の贖いを成し遂げられた(ヘブ 9:12)、父の独り子である“言”(1:14)によって語られました(ヘブ 1:2)。これらすべての箇所を、”言葉(λόγος)”は単数形が使われていて、数々の教訓や戒めの類とは区別されているのです。そして“守る(τηρέω)”も規定の遵守という意味よりも、見守る、注目する、特に信仰を守り抜く(Ⅱテモ 4:7)という意味で理解しなければなりません。

このイエスは、かつての思い出の“ナザレのイエス”ではなくて、今や天に上げられ、神の右の座に着いておられ、聖霊を通して教会の宣教と共にいてくださる“福音の弁護者”(v.26)であることを、私たちは感謝しましょう。説教は、世の知恵によって“いかにも分かったように神を説明する”ことではなくて、“宣教という愚かな手段によって”(Iコリ1:21)福音、すなわち神の“秘められた計画”(ロマ16:25)を語ることです。

3. 黙

ヨハネ黙示録はその特殊な文学タイプのゆえに、しばしば近代人には理解の困難なものでありました。しかしこれを典礼を手がかりにして読むと、私たちの地上の典礼と将来の天上の典礼の関係について(典礼憲章8)、その理解を大いに豊かにされるのです。

vv.1-8とvv.9以下とは、二種類の天のエルサレムの叙述であって、ある注解者はこのvv.9以下は20:3の後に移しかえて読むべきだと主張しています。見者ヨハネは恐らくエゼ40:2以下の預言を思いめぐらしていたに違いありません。そしてエゼ43:4以下に描かれている“神殿に満ちる主の栄光”が実現する様を幻に見ることを許されました。

「わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む」(エゼ43:7)という神の約束の実現とその栄光を、地上の典礼で私たちは前もって味わっているのだと、見者ヨハネはここで証しましたのです。

「われわれの救い主は、渡されたその夜、最後の晩さんにおいて、自分のからだと血による聖体の犠牲を制定した。それは、十字架の犠牲を主の再臨まで世々に永續させ、しかも、愛する花嫁である教会に、自分の死と復活の記念を託するためであった。それは、いつくしみの秘跡、一致のしるし、愛のきずなであり、キリストが食され、未来の栄光の保証がわれわれに与えられる復活の祝宴である。」(典礼憲章47)

ハレルヤ、アーメン。

5月12日 主の昇天

使 1:1~11 ヘブ 9:24-28,10:19-23 ルカ 24:46~53

1. ルカ

v.48 「あなたがたはこれらのことの証人となる。」

神学の目的は、最初の使徒たちが証した福音の上に、それぞれの時代の新しいメッセージを積み上げることではありません。ことばの典礼における聖書の朗読と説教は、時流に沿ったより現代的な思想や主張を語るために、古い聖書のお話を出発点として利用することではありません。それは“罪の赦しを得させる悔い改めの福音が、死んで復活されたキリストの名によって、エルサレムから始めてあらゆる国の人々に宣べ伝えられ続けている”(v.47) “教会の働き” であって、いつの時代にも、この教会の宣教の真正性を確保する唯一のものは使徒たちの証言なのです。

現在のカトリック教会の主日のミサでは通常、旧約聖書、使徒書、福音書の三つのテキストが朗読されて、それに基づいて“信仰の秘義とキリスト教生活の諸原則”(典礼憲章 52)が説教で語られます。いわゆる使徒書と呼ばれるもの(新約聖書の中で福音書以外の部分)に十分親しまず、使徒たちが福音をどのように説明しているかに無知であると、間違ったキリスト理解や見当外れな福音の解釈に陥りますし、旧約聖書を知らないまましていると福音の救済史的理解が欠けてしまって、“栄光の希望キリスト”の“秘められた計画”(コロ 1:27)が何のことか分からなくなります。

主イエスの昇天によって、教会の宣教は“昔のエルサレムの地方的伝承”という枠を超えて、あらゆる国の人々に宣べ伝えられるカトリック(普遍的)の宣教となりました(v.47)。昇天されたキリストは今は神の右の座に着いて、教会の宣教と共にいてくださり(マタ 28:20)、信じる私たちのために執り成してくださっているのです(ロマ 8:34)。

2. ヘブ

十字架上のいけにえが「ただ一度(ἐφάπαξ)」(9:12,26,28)の出来事であって、キリストは天の聖所に入って永遠の贖いを成し遂げるために神の御前に現れてくださった(9:12,24,26)ことを、秘跡的に再現してその奉獻に私たちを結びつけてくださるというのが、カトリックのミサ理解であります(ミサ典礼書の総則/前文 2)。ですから、かつてプロテスタント側から批判されていたように、司祭がミサの中で何度でもキリストのいけにえを繰り返すかのように誤解してはなりません。キリストのいけにえは「ただ一度(ἐφάπαξ)」であって、世の中にどれほど悲惨や困窮が満ちているとしても、教会が「神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する」(6:6)ような考え方で、間違った祈りをしてはならないのです。

イエスは天に昇って、「二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださる」(9:28)日を、「待ち続けておられるのです。」(10:13) 私たちキリスト者は、

福音の説教を聞いて、共にミサをささげる会衆が一人も減びないで(II ペト 3:9)「イエスの血によって、聖所に入れると確信しています。」(10:19) いや、そのように私たちは司祭の説教から“神のことば”を聞こうとしているのです。各自はよい準備をもって、“ことばの典礼”に与ろうではありませんか。

「公に言い表した希望」(10:23)とは、具体的には、ニケア・コンスタンチノーブル信条に言い表されているような“教会の信仰”であって、これをしっかりと保っている信者は、また正しく“ことばの典礼”から福音を聞き取ることの出来る人でもあります。

3. 使

v.8 「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがた(使徒たち)は……わたしの証人となる。」

聖伝と聖書を通して私たちに神の啓示が伝えられるのは、聖霊の働きによるということ、教導職だけでなく信徒たちも大切に考えなければなりません。「この教導職は神のことばの上にあるものではなく、むしろ、これに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである」(神の啓示に関する教義憲章 10)というカトリックの教えを、福音を説教する者にもこれを聞く者にも聖霊の働きが必須であるという意味で理解しましょう。ミサにおけるキリストのいけにえの秘跡的再現ということも、エピクレーシスの祈り(聖霊によってこの供えものが…わたしたちのために主イエス・キリストの御からだと御血になりますように)なしには考えられないことを、カトリックの信者はよく知っているのですから。

昇天の日の使徒たちは、父の約束された、間もなくの、聖霊降臨の日を待つようにと命じられました。彼らは「全世界に行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝える」(マコ 16:15)ことを開始するために、その日を待たなければなりません。しかし、現代の教会はその日を待っているではありません。すでに聖霊は使徒たちと教会の上に降り、今も私たちキリスト者と教会の上に豊かに働いておられます。「聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり」(エフェ 1:14)、説教する者にもこれを聞く者にも日ごとに福音を聞かせ、理解させてくださいます。

次週の“聖霊降臨の主日”は、あの最初の大いなる聖霊降臨の日の記念であり、私たちの教会が今はずでに聖霊によって集められた神の国の相続人であることを感謝し賛美する日なのです。

ハレルヤ、アーメン。

5月19日 聖霊降臨の主日

使 2:1~11 ロマ 8:8~17 ヨハ 14:15-16,23-26

1. 使

v.11 「…… 彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

現在、神の右の座に着いておられるキリストから遣わされて聖霊が働いてくださっているから、この世に教会が存在しているのだということを、先ず信じましょう。聖霊がその御業を行われる何よりも第一の場は、感謝の祭儀、すなわちミサです。ミサとは関係なく、ミサとは結びつかないで、聖霊の御業を考えたり期待することは間違っています。

聖霊の御働きがあればこそ、過去にキリストが十字架のいけにえによって成し遂げられた“神の偉大な業”すなわち“永遠の贖い”(ヘブ 9:12)を、私たちは聞いて理解することが出来るのだし、また感謝の祭儀を通してこのいけにえが秘跡的に再現されるのです。

聖霊は神でありますから、私たち人間が指図したり、自由に手に入れられたり出来るなどと思ってはなりません。そのように考えることは“悪事”であって(8:22)、私たちキリスト者は聖霊に対してただ賛美と感謝をささげて礼拝するのです。

聖霊は教会誕生の時に、福音を理解させ、人々を一つの信仰のうちにお集めになりました(今朝の叙唱)。そして今も、私たちの教会を一つの信仰のうちに歩ませてくださいます。聖霊は、“過去にただ一度成し遂げられた永遠の贖い”(ヘブ 9:12)を、キリスト者の現在の体験にしてくださるのであって、それは現に今私たちの教会と共に働いておられる神です。

2. ヨハ

v.26 「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」

復活節第6主日の学びで、「わたしの言葉」(v.23,24)とは十字架の言葉(I コリ 1:18)、すなわち神がキリストによって世を御自分と和解させてくださった福音(II コリ 5:19)のことであると説明しました。

かつて2002年に出版されたラッツィンガー枢機卿(ベネディクト XVI 教皇)の著書「典礼の精神」の中に、次のようなショッキングな発言があることを、あなたはお存じだったでしょうか。「……このことに関して、率直に言って典礼への養成は今日、司祭に対しても信徒に対しても、悲しくなるほどに欠けています。」(p.189) 実際、これまでに私たちが体験して来たミサでは、キリストの“過去にただ一度成し遂げられた永遠の贖い”への関心があまりにも弱く、まるでそれとは無関係に、一同でひたすら“現在の”神の恵みの業を“新しく”期待する、そんな御利益宗教的傾向が強かったのは事実です。

しかし、聖霊は「聞く耳のある者」(マコ4:9)には、過去のキリストの御業を現在の体験として“教え、思

い起こさせてくださる”のです。ただ聖霊だけが、キリストの贖いを信じる者に「神の栄光に与る希望」(ロマ5:2)、「福音の希望」(コロ1:23)を「保証」(エフェ1:14)してくださるのです。

3. ロマ

v.9 「神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。」

どうか、聖霊を目で見たり手で触れたり出来るもののように考えないでいただきたい。「聖霊によらなければ、だれも“イエスは主である”とは言えないのです。」(Iコリ12:3) 「あなたがたは、(キリストの血の)代価を払って買い取られたのです。」(Iコリ6:20、使20:28) それは神が、教会を“キリストと共同の(神の国の)相続人”(v.17)となさるためでした。

v.11 「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。」

聖霊は私たちの信仰と礼拝の対象であり、父と子と共に世々に生きて支配しておられる神なのです。

ハレルヤ、アーメン。

5月26日 三位一体の主日

箴 8:22～31 ロマ 5:1～5 ヨハ 16:12～15

1. ヨハ

vv.12-13 「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」

実際、今日、カトリック信者ばかりでなく、他のキリスト教諸派の人々の多くが、聖書や諸教父が語っているようにはキリストの福音を理解していないし、また理解出来ないと思っています。そこで教導職やキリスト教知識人の務めは、現代の状況に即してキリスト教の教えを再解釈することであるかのように、しばしば考えられ、また語られて来たように見受けられます。

聖霊が送られて来ていないから、今や聖書はそのままでは理解出来ないのであって、それに代わって教養ある現代人の再解釈が必要だと言うのでしょうか。現代人は、もはや聖霊を信じることも理解することも出来ないのだという暗黙の了解が、久しくキリスト教界を支配して来たことは間違いありません。

それにもかかわらずカトリック教会は、毎年復活節に続く年間の期節の最初に、三位一体の主日のミサを祝って来ました。そして「世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない」けれども、「あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである」(14:17)という確かな事実を目を向けるようにと教えられて来たのです。

プロテスタントにおいては“教会暦”(Church calender)と呼ばれているものが、カトリック教会では“典礼暦”であるということ、私はカトリックのミサに出席するようになって数年後にやっと気づきました。信者がミサでその朗読を聞くにせよ、また自らも家庭でこれを学ぶにせよ、“聖霊があなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる”(v.13)のために、典礼暦年という素晴らしい制度を神が与えてくださったということは、驚嘆に値する恵みの摂理です。私たちはただの一教養人としてではなくて、典礼暦年によるミサを共にささげるカトリック信者として、聖伝と聖書からキリストの福音を聞き、学んで、“聖なる者たちの受け継ぐ希望”(エフェ 1:18, 3:6, コロ 1:23, ヘブ 11:1)に生きるようにと招かれているのです。

2. ロマ

「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(4:25) 「神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたち(教会)にゆだねられたのです。」(II コリ 5:19) 「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(エフェ 1:7) このような信仰は、ただ聖霊が与えてくださるものであって、人間の知恵や力によるのではなく、純粋に神の賜物です(エフェ 1:8)。

v.5 「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

神が御子キリストによって成し遂げられた、罪と死と悪魔への勝利の福音(ヘブ 2:14-15、1コリ 15:57)を理解し信じることをしないで、“神の愛”(v.5)という言葉をただロマンチックに語るだけの人には、「神の栄光に与る希望を誇りにする」(v.2)などということは理解出来ないことでしょう。

「あなたは御ひとり子と聖霊とともに唯一の神、唯一の主。」(今朝の叙唱) 私たちの「信仰と希望とは神にかかっているのです。」(1ペト 1:21)

3. 箴

原始教会の宣教は、ここに描かれている“知恵”を“キリスト”に結びつけて理解し(1コリ 1:24)、御子による十字架の贖いが神の御業であることを説明するために、この箴言のテキストを用いました(コロ 1:13-22)。 私たちはそのような新約聖書の重要な説明を抜きにして、旧約聖書を理解することは出来ません。いやそれ以上に、「神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し」(コロ 1:22)という原始教会の宣教を抜きにしては、新約聖書を正しく理解することも出来ないのです。

w.30-31 が朗読されるとき、私たちはそれが主日のミサを指して述べていることに気づきます。「今日こそ主の作られた日。わたしたちはこの善き日を喜び楽しもう。ああ主よ、わたしたちを救ってください。ああ主よ、わたしたちに栄光を。」(詩 118:24-25/フランシスコ会訳)

ハレルヤ、アーメン。